

園番号 626

令和6年度 奈良市立二名幼稚園 研究実践概要

園長名 杉浦 順子
全園児数 7名

1. 研究主題

「豊かな感性で感動を表現する幼児を目指して」
— 身近な環境とのかかわりを通して —

2. 研究年度

2年度

3. 研究主題設定理由

本園は住宅地の中にあるが、核家族や少子化のため地域との接点も少なく、入園するまでは家族中心の生活で温かく見守られていることが多く、生活体験や人とのかかわりが希薄になってきている。幼児期に自分の思いを出しながら思い切り友達と遊ぶ楽しい体験や、思いをいろいろな方法で表現する体験等の生活体験が不足している。

そこで、身近な環境（人やもの）とのかかわりを通して、感動体験を重ね、その感動を表現できる環境や援助の工夫をして、意欲的に活動する幼児を育てたいと考え主題を設定した。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

- ・幼児が身近な環境とのかかわりの中で様々な感動体験をし、感じたことや思ったことを活動の中で自由に表現し、楽しい生活ができるように努める。
- ・身近な人々とふれあう体験を通して自分の思いを相手に伝え、相手の思いもしっかり聞きながら、園生活を楽しいと感じ、意欲的・主体的に遊ぶ中で、たくましく生きる力を育み、心豊かに思いを表現する幼児を育てる

②研究の重点

- ・研究主題について、職員の共通理解を深め、組織的・計画的・継続的に取り組みの方法を探り実践する。
- ・園と家庭・地域・小学校との連携の充実に努め、地域の教育力を活かしながら幼児が様々な人と触れ合い、豊かな体験ができるような日々の保育内容の工夫に努める。
- ・幼児が安心して園生活が送れるように、保育者が一人一人の実態を把握して、発達を促していく。
- ・幼児が遊びや生活の中で自ら身近な“ひと・もの・こと”など周囲の環境とのかかわり、体験することを通して主体的に活動する姿や深い学びにつながる環境の工夫や援助を探り、幼児理解に努める。

③活動の方法

☒ねらい ☐活動の様子 _____身近な環境 ☐感動を表現する姿

【事例1】 5歳児 5月 「紫やけど、白になった」

- ◎ 友達の思いを聞いたり自分の考えを出したりして遊びを進めようとする。
- ◎ 身の回りの自然を遊びに取り入れ、試したり工夫したりして遊ぶ。

園庭に咲いている花を使って色水遊びをしていたA児。繰り返し遊ぶ中で花びらは1度で捨てるのではなく何回か使えること、繰り返し色が出せることに気付いた。「まだまだ色が出るわ」と、花びらを継ぎ足しながら何度も色水をつくっていると「うわ、すごい！」とA児が声を上げた。「どうしたの？」と保育者が聞くと、A児は「何回もジュースつくってたら紫色の花びらが白くなった。なんでやろう」とすり鉢の中の花びらを見せた。保育者は「ほんとだね」「不思議やね」とA児の発見や驚きに寄り添った。「みんな知ってるのかな？」と問いかけると「知らんと思う。教えてくる！」と近くで遊んでいる幼児に声を掛けに行った。花びらが白くなったことを聞いたB児とC児は「なんでやろう」「色が抜けたら白になるって知らなかった」「紫やけど、最初は白い花やったんかな」とA児と一緒に考えている。「他の色の花も白くなるかやってみる！」とA児は別の色の花を探しに行った。

【考察】

- ・ 4月から継続して遊ぶことで、花びらを繰り返し使えることを知った。同じ花びらを何度も使って遊ぶことで色素が抜け、新たな発見となった。予想しえない発見、驚きが誰かに伝えたい、分かち合いたいという気持ちに繋がり、保育者や友達に伝えにいく姿となった。



【事例2】 5歳児 6月 「火山みたいや」

- ◎ 友達と共通のイメージをもち、協力しながら遊ぶ。
- ◎ 穴の深さや嵩に気付き、試したり考えたりする。

どろんこ遊びで水路づくりをしている。数日かけて遊ぶうちに長く複雑な水路ができあがった。水路をつくる際に掘った土を1か所に集めていると高い山ができあがった。するとA児がその山に穴を掘り始めた。掘った砂をバケツに集め、満タンになると「B君これ持って行って」「オッケー」と友達と協力しながら掘り進めていく。

「火山みたいやな」と言いながら穴に入ると「足の真ん中（脛）まで入った」とA児。その姿を見て保育者は「自分の体で比べてみたの？面白いね」と認めた。「もっと深くしよう」「いいな」「どこまで大きくなるかな」と相談しながら遊ぶ。

数日後、深く大きくなった穴を見て「めっちゃくちゃ大きくなったな」「膝まで入った」「2人一緒に入れるようになったで」と満足気に話している。「前は真ん中までだったのに深くなったね」と保育者もA児とB児の言葉に共感した。するとどろんこの水路に水を流していたC児が「ここにも水入れていい？」と聞いた。

「いいよ！入れてみて！」とB児が言ったので「水入れたらどうなるんだろう？」と保育者が聞いた。「お風呂みたいになるかな」「多分水いっぱいいるで」と予想している。

水の入った重いバケツを友達と協力し、バケツリレーで山まで持ち上げ、水をためていく。水が穴いっぱいになると、A児がそっと穴の中に入った。「あれ？膝までやと思ってたけど、膝の下やったわ」「もうちょっと水入るかな？」「2人で入ったらどうなるかな」と穴を深くしたり試したりしていた。

【考察】

- ・ 大きさだけでなく深さにこだわって掘る姿が見られた。自分の体を使い最初は目分量で比べていたが、穴に水を入れることで深さが可視化され、より正確に深さが分かるようになった。
- ・ 深さや嵩が分かり、遊びながら予測したことを友達同士相談したり試したりしながら遊ぶ。不思議さや疑問、発見や感動があることで心が動き、友達や保育者に伝えようとする姿となった。



【事例3】 5歳児 7月 「天井まで届け」

- ◎ 友達と共通の目的をもって遊ぶ楽しさを味わう。
- ◎ 自分なりの言葉で思いや考えを伝える。

最初はカプラを「井」の形で高く積んでいた子どもたち。この方法はすぐに高くなるが、積み上げていくにつれ歪んでいき、ある一定の高さまでくると倒れることが続いた。「すぐ曲がるしグラグラする」「まっすぐするの難しいな」「倒れにくい形にしよう」とより頑丈で高く積むために相談を始めた。試行錯誤するうちに8角形と16角形でそれぞれ積み上げていくと井形で積んだ時よりも高く積むことができた。「こっちの方が安定するな」「先生より高くしよう」「カプラいっぱい使うから足りるかな？」カプラが高くなるにつれ足場も高いものが必要になった。

今まで使っていたゲームボックスを増やし、高くするもののすぐに足りなくなった。「どうしよう」「もう無くなった」「これじゃカプラできないで」と言う子どもたちに、保育者は「それ以外に他に使えるものはないの？」「今まで他の遊びで使ってた物で、台にできるものはないかな？」と提案した。「探しに行ってみよう」と倉庫や他の部屋を見に行き「これ使えるかなあ？」「分からんけどやってみよう」と巧技台やベンチなどを運んできては足場をつくり直し「天井まで届くくらい高くしたい」と、どんどん高くしていった。

「もうカプラない」「でもまだ天井まで行ってないで」全てのカプラを使い終わったものの、2つのタワーは天井まで届かなかった。「どうする？」「このままはあかんしな」「相談しよ」諦めて今のまま保存するか、どちらか1つを残して高くするか、新しくタワーをつくるかの3つの意見になった。保育者は少し離れた場所で見守り、タイミング良く声を掛けるようにした。「みんなでつくったからみんなで決めないと」「〇〇ちゃんはどうしたい？」「意見分かれたな」「どうしよっか」話し合いは紛糾しなかな意見がまとまらなかったが、より頑丈だった16角形のタワーを残して更に高くすることに決まった。

「電気（電灯）に頭が付きそう」「高いからちょっと怖いな」「慎重にしないと…」その後、

数日かけて天井まで届くタワーをつくることができ、「すごい！」「ほんまに天井までいったな」と誇らしげな顔でタワーを見ていたのが印象的であった。

【考察】

- ・遊びや活動の話し合いを折にふれて行ってきた。時間はかかったが、保育者の援助のもと自分たちで話し合い、解決策を出すことができた。普段は自分から意見を出すことができない子ども友達に問いかげられることで自分なりの言葉で思いを伝えることができた。
- ・子どもたちで話し合う時間や機会を、繰り返し経験することで相手に伝えること、相手の言葉を聞くこと、折り合いをつけたり受け入れたりすることができるようになっていくと考える。



5. 研究の成果

- ・継続して遊びを楽しむ中で、砂や水、様々な素材の性質に気付き、活かしながらイメージに近づく方法を、友達と考えたり試したりしたことは、主体的に活動する姿につながったと考える。また、試したことが予想外であったことも、次への試行錯誤や学びにつながっていくと感じた。その時に、タイミングを逃さず、保育者が幼児の思いを大切に受け止め、認める言葉がけなどの援助や環境の再構成が学びの深まりにつながったと考える。
- ・様々な人やものとのかかわりを持ち、交流する中で、刺激を受けたり、気付きや発見をしたり、他者との違いを刺激し合って高め合っていこうとする姿が見られた。こういった経験を重ねることで、自分の思いを言葉だけでなく、いろいろな表現を通して伝えられるようになってきている。

6. 今後の課題

- ・幼児は生活の中で、様々なひと・もの・ことに関わって成長していく。保育者は、幼児の一つ一つの言葉や行動の意味を見極め、カリキュラムに沿って、どのような成長の過程にあるか読み取っていく必要がある。今後も幼児が主体的に活動できる援助や環境構成のあり方を探り、計画・実践・評価反省を繰り返し保育の質を高めていく必要がある。